
深呼吸

西くん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深呼吸

【コード】

N6746P

【作者名】

西くん

【あらすじ】

戦争に勝ったにもかかわらず、その後にも私の周りは残酷だった。

転移

「いいかい、君。これは『拷問』などという下劣な行為なんかじゃあない。『実験』だよ。私達の国が戦争で勝つためのね」

これは、医者言葉。

私が務めているのは国の最も安全と言える場所に位置する病院。

そう、病院なのだ。

ここは、病院のハズなのだ。

人の怪我を治し、人の病気を治し、人の命を救う施設なのだ。

「だからって、敵の傷を治してどうする？」

この病院の地下二階。

階段を下るだけでも時間がかなりかかるが、それでも地下二階と言うのだから地下二階なのだろう。

「この施設は仲間に対しては十分に役立っている。それに、どうせ死ぬであろう敵国の女子供を生かしてやっているのだ。これほど有意義な再利用があるか？」

その地下二階にたどり着くには、階段を下りてすぐの重々しい扉を専用の鍵で開けなければならぬ。

「当たり前だ。叫び声が夜中にうるさく眠れないのは不快だからな」そして、その扉を開けたら目の前には長い廊下が果てしないほど続いている。

その長い廊下の左右に、ほぼ均等に四畳半ほどの個室が用意されている。

「もう休み時間は終わった。さっさと持ち場にもどるがいい」

その個室は私達の為の部屋ではなく、敵国の女子供の監禁部屋に間違いない。

そこでは、ある『実験』が行われている。

『人体に最も影響を与える苦痛』の実験で、はっきり言えば女子供を拷問する方法の他に無い。

そして人体の痛みや感覚が麻痺した場合、その者は『出来損ない』として殺される。

私の仕事はその者達が自殺するのを防ぎ、止めなければならぬ。口を布で縛り舌を噛めないようにし、必要最低限の自殺に使用できる道具は個室には置かない。

あとは、毎晩の悲鳴を我慢すればいいだけだ。

我慢できれば、いいだけだ。

深呼吸

「お前の監視してる娘、もう処分されるらしい。あと三日」
私が耿耿《たんたん》と食事を取っていると、見知らぬ男から声をかけられた。

「何故、そのようなことを知ってるのですか？」

あなたは誰ですか、とは聞かない。

「あのクソ医者から話を聞いた。もうすぐ処分するからよろしく、つてさ」

「・・・・・・・・・・は」

私は、不意に怒りがこみ上げた。

あの医者、人の命をなんだと思ってるんだ。

散々痛めつけ、拳句の果てには処分だと？

「なんか悪い事言った？」

私の感情を読んでか読まずしてか、男が心配そうに言った。

「ああ、すみません。大丈夫です。色々ありがとうございます。」

「いえいえ。どうもどうも」

男は適当に相槌を打ち、どこかへ消えていった。

「・・・・・・・・・・三日後か」

まだ皿に少々残っているサラダと飯をそのままテーブルに残し、私は仕事に戻った。

絶対禁止的希望

重々しい扉を開け、真つ暗な廊下を記憶力任せに歩く。

「・・・・・・・・つと、ここだな。」

自分の仕事の対象を見つけるのには時間が掛かったが、なんとかたどり着くことが出来た。

「・・・・・・・・」

あと三日。

この部屋にいる少女の命だ。

恐らく、その間も拷問は続くのだろう。

「・・・・・・・・いつそ、俺の手で殺せば」

この少女は拷問を受ける事は無い。

どうせ死ぬのだ、そのほうが楽だろう。

今でさえ、今日の拷問の痛みで苦しんでいるに違いない。

私は鍵を挿し、ドアを開けた。

そこには、予想の通り背中をこちらに向け、泣きながら呻く少女の姿があった。

その背中には幾つもの刺し傷と、焼けたような後。

何をされたかなど、想像したくも無い。

「あ・・・・・・・・」

少女はこちらに気付いた途端、何かを後ろに隠した。

「・・・・・・・・何を？」

銃だろうか。

別に撃つてくれても構わないが。

「あ・・・・・・・・ああ」

少女は何かを言おうとしたが、それを止めて即座に『何か』を自分の手首に走らせた。

「・・・・・・・・おい！やめろ！」

慌てて『何か』を取り上げたが、その行為は止めないほうが良かった

たのかもしれない。

「…………ご…………ごめんなさい」

少女は泣きながら、決して広くは無い部屋の角へ逃げた。

その『何か』は、私達の軍隊に支給されているダガーナイフだった。握るタイプの物で、特に力が入らず相手を殺せる物だ。

「なんで、こんな物……………」

誰に聞くでもなく、ただ独り言のような発言だったのだが、

「お…………落ちていたんです」

それに酷く臆病に答えてくれたのは、他でもない異常な程の恐怖感だったに違いない。

「…………自殺か。」

たしかにこれを握って手首に垂直に突き刺せば、簡単に死ねるだろう。

そして、刺した後の痛みは想像を絶するに違いない。

だが、この少女はその覚悟を決めた上での行為だったのだろう。その行為をまんまと踏みにじったのは、他でもない私である。

「…………ああ」

なんてことをしてしまったのか。

私は酷く脅える少女に近付いた。

「……………」

なんと言えば良いのか分からないにもかかわらず。

「……………」

目の前の少女の目に映っているのは、さぞかし人間の形をしていないのだろう。

「君に、一つ。」

酷く惨めな見かけの少女に、化物は言った。

「戦争は終わった。あと三日で君はここを出られる。だからそれまで耐え抜くんだ。」

……………

.....

.....何を？

.....私は何を言っている。

何を言った？

「.....ほ.....本当.....ですか？」

責任感からだろうか、良心からだろうか。

はたまた、ただの偽善に過ぎない。

「勿論本当に決まっている！辛いかもしれないが、なんとか耐え抜いてくれ。」

耐え抜く？

一体何に？

目の前の少女に言ってる言葉なのか？

「.....！」

.....ああ。

少女の目に、希望が宿ってしまった。

「あ.....ありがとうございます！」

「いや.....当たり前のことを.....」

言葉につまり、私は外に出た。

何かに向かって礼を言い続ける、一人の少女を残して。

幸福

その日から、彼女の目は変わった。

幾度と痛めつけられようが、彼女の涙ぐんだ目の中には少なからず、希望が混じっていた。

言わずとも、その原因は私にあるのだが。

「・・・少し・・・痛かったです・・・」
痛ましい傷口を見ている私に向かって、彼女はまるで聖母のような笑みを浮かべた。

その笑みを見るたびに私が思うことは、はてしないほどの罪悪感だったという事は彼女には分かるはずもなかったが。

『あと三日でここを出られる』

昨日以前の彼女の目はまるで、死と未来の自分が受けるであろう痛みしか映していなかった。

それを見た私の口から出た言葉は、彼女をもう一度生かすことになったのだろう。

彼女をもう一度、殺すこととなったのだ。

「ああ・・・俺は・・・」

私は激しい自己嫌悪に陥った。

彼女は確かに、三日後には違う世界に居るのだろう。

そしてそこには、ご先祖達が待っているということも真実には違いない。

しかし、その意味で言った、と彼女に言えば、この纏わり付くような罪悪感からも逃げられるというのか。
それもまた違う。

この罪悪感是她女を生かしてここから出さなければ、私に一生絡み付く。

「・・・処分か」

あの男の話によれば、三日後には彼女は処分される。

それはもうこの病院には『必要ない』ということだ。

ならば、その不用品を私が拾えばいい話ではないのだろうか。

「・・・・・・・・やってみるか」

私はあの忌々しい白衣を纏った化物の元へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6746p/>

深呼吸

2010年12月30日23時59分発行